

主な登場人物

・アレン

○表（フランが知っているアレンさん）

白髪、緑目。穏やかで優しい。王級で働く魔法研究員様。
面倒見が良くて素敵。

魔法使いの制服であるローブの色は、一般職の黒。

●裏（フランが知らない本当のアレンさん）

紺色に星屑が散った瞳。（髪色は同じ）

国王直属の部下で、星を詠んで未来を視る『預言者様』

ローブは紺の生地に金色の刺繍が入っている預言者様特別仕様。
欲しいものはどんな手を使ってでも手に入れる。

・フラン

田舎の村で育った、花を育てる特技があるだけの普通の女性。
善良な一般人。アレンさんに憧れている。

次の頁からいきなり本編がはじまります←

1. 恩人の『アレンさん』

ここは王都の隅っこ。

城下町の喧騒の中に、ポツンとある小さな花屋。

一階は店舗で、二階は住居となっている幅が狭くて奥行きがある建物だ。

名前は花屋フラン。店主の名前をそのまま使った、とっても安直な店名である。

そしてそのフランが私。王都から少し離れた場所にある小さな村で育った、平々凡々中肉中背な一般女性である。

髪の色は茶色。瞳は緑。ひと目見ただけで、大地属性の親和性が高いと丸分かりの容姿をしている。

背が低く、胸が小さいのが玉に瑕——なんて。玉と言えるほど、

よく出来てはいないけれど。

とにかく、発育が良くなかったことだけはコンプレックスな私だけれど、運は良い方だと思っている。

窓の外の喧騒をぼんやりと見つめる私は椅子に腰かけ、会計用のカウンターに頬杖をついていた。

時計の秒針の音を聞きながら、くあつと欠伸を洩らす。

今日も平和で、退屈だ。見事に一人も客が来ない。

（まあ、それでも十分過ぎるほど儲かっているんだけど……）

正直、太客すぎる太客がいるので、こうして店番なんてしなくていいのだ。

けれど出店の際にまるっと全て援助して貰い、そのお陰でこうしてお店が出来ているので、なるべく勤勉に働きたい。

(……暇すぎて、だらけているけどね……)

だって一人も客が来ないのだ。

あまりにも暇すぎて、緊張感なんて持てやしない。

私はふああっ、ともう一回欠伸を洩らした。

暇で仕方ないと、寝不足じゃなくても眠くなるから困ってしまう。
もういっそのこと、お昼寝でもしてしまおうか。今日は天気が良くてポカポカしているし——と、思い始めたところで。

出入口のドアが開き、カランカランと入店を知らせるベルが鳴った。

「——あ、いらっしやいませ！アレンさん、こんにちは」

「こんにちは、フランさん。お邪魔します」

透き通るようなペリドットの瞳でこちらを見つめ、にこりと笑って歩み寄ってくる長身の男性。

この方はアレンさん。王宮魔法使いの証である黒いローブを身に纏った、魔法研究員様だ。

今日も、納品する商品を受け取りに来てくれたのだろう。

「お元気そうで何よりです」

アレンさんが首を傾げたことによってサラリと美しい白髪が流れる。深くしっとりとした声が本当に耳心地好い。

更にはにっこりと笑いかけてくれる柔和な美貌が目の良い……♡

「はい……♡」

私は立ち上がることを忘れて、うつとりと目の前の美丈夫を見上げていた。

ああ、今日も本当にかっこいい。しかも香りまで良い。最高だ。

こんな素敵な方に目をかけて頂けている上に、定期的にお会いできるとはなんて。本当に私は幸運だ。

「ふふ、もしかしてウトウトされていたか？口の端に……」

「え……？」

長くて綺麗な指が顔に近付いてきて、する、と右側の口の端を撫でられた。

「ほら、よだれが垂れていましたよ」

「……!? あ、あ、くくっ!! すみま、せんっ!」

テラリと光る指先を見せられて、私はあまりの恥ずかしさに赤面した。見ていられなくて両手で顔を覆い、悶える。

「ん……、ふふ。いいえ？」

「……？」

ピチャリ、と変な音がして。何の音……？と首を傾げる。

指の隙間からアレンさんの様子を窺えば、上げていた手が下ろされたところだった。

「ちよつと抜けてて、可愛らしいじゃないですか」

「え……!? か、かわ……!?」

ゆるりと目を細めて見下ろされ、ドツキン! と心臓が跳ねた。

なんてことだ。魔性だ……。と放心し、考えていたことが全て吹っ飛んだ。

「ふふふ」

ゆるゆると微笑んでいるアレンさんが、本当に素敵で。私がいつまでもテレテレもじもじしていると、彼は店内の奥へ繋がる扉に視線を向けた。

「納品の準備は、出来ておられますか？」

「あ、はいっ! もちろんです!」

勢い良く立ち上がって、ガタンツと木製の丸椅子が倒れる。

あわわ、と焦って椅子を起こし、すみません! と声をあげると、

アレンは笑って「いいえ」と応えてくれた。懐が深い。優しい。

「ちよつと、裏から取ってきますね！少々お待ちください」

「重いものもあるでしょう？わたしも手伝いますよ」

いえ、そんな！と遠慮をするが、首を傾げてゆるりと笑いかけられる。それに対して私は苦笑し、グツと押し黙った。

この方は意外と、押しが強いのだ。

「じゃ、じゃあ……バケツを運ぶのを、手伝って貰えますか？」

「ええ、もちろんです。沢山こき使ってくださいね」

「いいえ、そんな！」

お世話になっている方にそんなことさせられない、と思うものの、これもまた押し切られる気がしてならない。

私は葛藤を抱きながら、アレンさんを引き連れて奥へ移動する。

そしてまずは、準備していた商品を確認して貰うことにした。

「ふむ、ふむ……問題ないようですね」

納品する花をざっと確認し終えて頷くアレンさんに、私はホッと胸を撫で下ろした。

注文通りに花を成長させているし、しっかり確認もしている。けれどこうして確認してもらう際には、もし不備があつたらと不安になつてしまうのだ。

「いやあ、本当に素晴らしい。助かります。他では本当に、手に入らないので……」

ぐらりとアレンさんが見回したのは、納品するお花達。

これらは全て、現状入手難易度が高いものだ。

季節外れのものであったり、咲かせるまでに途方もない年月が必要であつたり、咲かせる難易度がとても高いものであったり。種さえあれば魔法でどんな花でも簡単に咲かせられる——という、私の

特技を遺憾無く発揮して作成した、商品達である。

「えっへへ……お役に立てて嬉しいです♡」

こうして恩人であるアレんさんの役に立てることが、一番嬉しい。だって、アレんさんが旅行のついでに私の故郷に立ち寄ってくれていなければ。そしてそこで出会った私の、小さな才能を見出してくれていなければ。今の私はいないのだ。

こんなちっぽけな私でも、国のために役立てている。ああなんて、素晴らしいことなのだろう。

それもこれも、出店するにあたっての金銭面な支援をゼーんぶしてくださって、都会を知らない両親への説得もしてくださった、アレんさんのおかげなのだ。

その上、仕事まで持ってきてくれて——本当に、頭が上がらない。私は用意された箱で、用意された仕事をして、育てた花をアレん

さんに納品するだけでいい。

こんな幸運があってもいいのだろうかと思う時もあるのだが、お役に立てているようなのできつとこれでいいのだろう。

そして、少しずつではあるがこのご恩を返していければと思う。私に出来ることは少ない。だから、少しずつ、着実に。アレンさんへ、恩返しをしていきたいと思う。

——結局、私が運んだものと言えば本当に軽いものだけで、殆どの商品はアレンさんが運んでくれた。

店の外で待機していた馬車に詰め込み、こちらに会釈した御者が出発する。

アレンさんはいつも通り少しゆっくりしてから帰るようだ。

私は店先の看板をクローズにしてから、彼を二階のリビングダイ

ニングに通した。二人用のテーブルセットまでご案内して、手早くお茶の準備をする。

そうして私は二つのマグカップを手に、アレンさんの正面の席に着くのだった。

「そういえば、最近はどうですか？何かお悩みなどありませんか？」
「うーん……」

いつもの調子で近況を訪ねてくれるアレンさんに、私は首を捻った。

（悩み……かあ……）

あるにはある。それはずーっとモヤモヤ悩み続けているものと、結構前から悩んでいるが人に相談し難い身体的なものだ。

「うーん、やっぱり、近所付き合いがあまり上手く出来ないことですかねえ。やっぱりずっと、皆さんどこか余所余所しくて……」

とりあえず後者の悩み事は置いておいて。私は以前からアレンさんに話していることを、改めて相談することにした。

ここでお店を初めてから早いものでもう、半年になる。

引っ越してきた当初からご近所さんや市場の方々には、意識して日常的にきちんと挨拶をしており、ご迷惑をおかけしたかもと思つた際には謝罪やお詫びをしている。そうして友好的に接しているつもりなのだが、なかなか仲良くなれない。

どこことなく、遠巻きに見られているような——それでいて、話しかけると一言二言交わして、皆さんそそくさと去っていく。

買い物をしている際に店員さんに話しかけると、追い払われることも邪険にされることも無いのだが、どこことなく早く立ち去ってほしそうにしている気配を感じた。

「都会は地方より、ドライな関係を望む方が多いと言いますからね。

きつと、貴女が悪いわけではないと思いますよ」

「そう、でしょうか……」

自分から怖いオーラのようなものが出ているのかとも思ったりしたが、アレンさん曰く、どうやらそれは違うらしい。

しかし、どうにも腑に落ちない。ドライな関係を望んでいるのかもしれない、と慰めていただいているのは分かる。

けれど、皆さん私以外の方には、とてもフランクに接しているのだ。私にだけ、態度がおかしくて――

「フランクさん？」

「……はい？」

名前を呼ばれて、顔を上げたら。きらり、とアレンさんの瞳の中で星が煌めいた。

「——あれ？」

紺色の中で星がキラキラと輝く様子を見ていたはずが——気が付くと私は、アレンさんのお膝の上でぼんやりとしていた。

パチパチと瞬きを繰り返しながら、状況を確認する。

まず、アレンさんは長椅子に腰掛けているようだ。そして私は、そんなアレンさんのお膝の上で横向きに座っている。それから私はアレンさんの右肩に、左側の側頭部を当てていて。べったりとくっついていようだった。なるほど、理解した。

「ああ、気が付きましたね。急にウトウトされて——心配だったの
で、とりあえずこうして様子を見ていたのです」

「そうだったんですか……すみません、また。たぶん、寝不足だった……のかな？」

私はたまにこうして、ふっと眠りこけてアレンさんに保護される

ことがある。

度々面倒事に巻き込んでしまつて申し訳なく思うが、アレンさんが毎回見守ってくれているので罪悪感よりも安心感が勝っていた。

「もしかして、要求する量が多すぎますか？ 少し、減らした方が……」

さらりと髪を指で梳かれて、心配そうな色を宿した緑の双眸に瞳を覗き込まれる。

距離が近くて照れてしまふが、この距離の近さがアレンさんなのだから仕方がない。

「いえ、そんな！ 仕事量としては、本当に問題ないんです。寧ろ、もっと多くてもいいくらい……。ただその、最近少し、睡眠の質がよくなって」

「そうなのですか……？」

悩みはと聞かれて思い浮かんだもうひとつのことを、詳細は語らずに話題に出してみる。

実際のところは眠りが浅い自覚はないのだが、こうして意識を失ってしまう原因は、それくらいしか思い当たらなかった。

「それは、すごく心配です。睡眠は人間にとって、とても大事なものですから……詳しく症状を教えてくださいませんか？」

「え、ええっと、それはあ……」

とつても、言いづらい。それはデリケートな部分の話なので、異性であるアレンさんに言うのは、憚られることだった。

「いえ、あの、そんな、大したことではないので！あまりにも引きずるようなら、また改めて相談させてください」

「そうですか……わかりました」

「ええ、ただ起きた時にお股から白い液体が垂れてきて、それで眠

りが浅いのかなと思っただけなので」

うん、と頷いてにっこりと笑ったアレンさんに、私はホッと胸を撫で下ろした。よかった、根掘り葉掘り聞かれたら恥ずかしい思いをするところだった。

「そうでしたか」

「え？」

もう会話は終わっていたはずなのに更に相槌が返ってきて、私はキョトンと目を丸めた。首を傾げると、アレンさんが笑ってかぶりを振る。

「いいえ、なにも」

「……??」

今日もアレンさんはミステリアスだな、と反対側へ頭を倒した、私であった。

夕方、そろそろお暇しますとアレンさんが言うので、私は店舗の玄関口までお見送りに来ていた。

いつもお帰りの際に渡す小瓶も、きちんと手に持っている。

「アレンさん、これ」

「……ああ、ありがとうございます。きちんと味わっていたくださすね♡♡」

「はい！——……、……？？？？」

あれ、私は今……何を渡したんだっけ？

アレンさんの手に握り込まれて、ローブのポケットに仕舞い込まれた小瓶について思い出せず、小首を傾げる。

（何だったっけ、何だったっけ……？……そう、確か……今朝白い液体を中から掻き出して、それから綺麗になった中から分泌された

透明な体液を、いつも通り小瓶に溜めて――」
靄のかかっていた思考が晴れそうになった瞬間、フランさんと名前を呼ばれる。

「それでは、これで。また明後日に来ます」

「――あ、ふあい……♡あいがとう、ごじやいまひたあ……♡」
私は椅子に座ってカウンターに凭れかかったまま、力無くアレンさんに手を振る。

カランカラン、とベルが鳴る音がして、それから静かにドアが閉まった。

「……おッ♡♡ふっ、ふう……♡」

足腰がガクガクしていて、お腹の奥が熱い。

更には胸の先や割れ目の上辺りがジンジンとじていて、下着がグ

ツシヨリと塗れていた。

（はあ、またかー……）

夕方になって疲れが出ると、私はこうなってしまうのだ。

舌も何だかジンジンとしているし、お見送りが舌足らずな喋り方になってしまい、気恥ずかしさが残る。

「……ふうー。——あっ、まずいっ！」

やっと落ち着き、息をついていれば——お股から何かが、ゴボリと溢れる感覚があった。

私は慌てて立ち上がり、お手洗いに駆け込む。それから慌ててスカートの中に手を突っ込み、下着をずり下ろした。

すると直ぐ様、太ももにたらりと垂れる白濁とした液体。下着にも、しっかりと付着している。

「あゝもう、まただあ……。はゝあ……。これ、何なんだろうなあ」

毎朝と、たまに夕方にもここから出てくる白濁とした液体――
基本的に一人で過ごしているから、人に見られる危険はないのだ
けれど。不可解すぎて、とても気になる。

（病気じゃないといいんだけど……）

胸の内側に巣くう不安を抱えながら、私はペーパーで白濁を拭つた。しかし拭っても拭っても、どんどんと溢れてくる。

そうして暫くの間、私は青臭い液体を拭い続け――そろそろ無くなりそうというタイミングで、お股にペーパーを押し当て、お腹にグツと力を入れた。

「……よし」

こんもりと便器の中で山になっているペーパーを流し終え、ホツと息つく。そして洗面台の蛇口を捻って石鹸を使い、手の洗浄を済ませた。

ドアを開けて籠っていた手洗い場から出ると、窓の外の景色は既に真っ暗になっていた。

（――？さっきまで夕方だったのにな……）

不思議に思いはしたが、それを特段おかしいとも思えず。私は夕飯の準備をするために、二階へ移動する。

そして夕食を終えてから、『そういえば玄関の施錠をしていなかったような』と玄関へ向かった。

だが不思議なことに、きちんと施錠はされていたのだった。

その日の夜。浴室でお湯を浴びながら、私は無言で自分の体を見つめていた。

（やっぱり……ちよつとずつ、大きくなってるよね……）

前はこんな大きさがなかったのにと考えながら、私は自分の胸の先を見つめる。

赤く腫れ、ぷっくりとしている二つの突起。

割れ目の上にある突起も、同様に大きくなっている気がする。

どちらも、昔はこんなに目立つ大きさがなかった。

それなのにいつからか少しずつ大きくなっていった——何もして
いなくとも、ジンジンするようになっていた。

けれどつい先日受けた健康診断では、何も問題は無いと結果が出ている。

診断してくださったのは王宮勤めのお医者様だ。名医と有名で、

腕が良いと聞いている。

だからきつと、その診断に間違いはないのだろうけど——やっぱり、体がおかしい気がするのだ。

（でも……ど素人が体感だけで、お医者様の決定にケチをつけるのもな……）

何より、恩人のアレンさんから紹介していただいた方なのだ。そんな方にケチをつけるのは——どうかと思う。

それに万が一にもアレンさんの耳に入って、呆れられたらと思うと身が竦む。

いつも穏やかな光を湛える緑の瞳が、凍てついて私を射貫くだなんて——想像しただけで、泣いてしまいそうだった。

「……ふう」

こんなことを鬱々と考え込んでいても仕方ないと、私はかぶりを

振った。

現状、肥大したように感じるのと、たまにジンジンするだけで他に症状はないのだ。ただ、たまたま肌が過敏になっているだけなのかもしれない。前向きに考えよう。

——そう、気持ちを切り換えようとするが、一度落ちてしまった気分が、なかなか上がらない。

「……うん。こんなときは、オナニーでもしよう」

考えても仕方がない時は、一旦別のことを考えるに限る。

私は自分が何を口走ったのかも理解しないままに——勝手に動く手を、下半身に当てた。

——くにゅっ♡

「あ、ん……っ♡」

いつの間にか血が集まり、ぽってりと腫れて大きくなっている割

れ目の上の突起を指先で撫でる。

くると円を描くようにして弄くると、そこが熱くなった。

「あ……、しゃがまない、と……♡」

これをする時は足を開いてしゃがんで、壁際の一点へ開いたお股を向けなければいけない。

そしてそれに加えて、なるべく音を立てながら突起を弄り、中指で撫でて、たくさん声を上げなくてはならない。

いつからか自分の中でそんなルールができた。そのため毎回必ず、私はそれを守っているのだ。

「クリトリス、触ります……♡コリ、コリ、してて……触ると、きもちいい、です♡」

アレンさん曰く、浴場を清潔に守ってくれる効果のある水晶に向けて股を開きながら、私は言葉にして報告をする。

自分の口から発せられた声を聞いて『はて、クリトリスとは…？』と一瞬不思議に思うが、くりゅんっ♡とそこを撫でる快感で、思考が霧散した。

「勃起クリトリス、ジンジンしてて、あふっ♡触って、ほしいれすっ♡私の指じゃなくて、あなたの、口でちゅこちゅこして♡ほしくて♡レロレロなめて、ほしいれすっ♡♡」

突起を弄りながらに股となり、私は反対の手を使って割れ目をパカリと開く。

そうしてヒクヒクと震える穴を水晶に見せつけながら、尚も突起を弄り続けた。

「早く、犯して、くらさい♡あなたの大きいおちんぽで奥の奥まで満たして、特濃ザーメンください♡♡あうっ♡この、皮から顔を出したクリトリスも見て、さわってえ♡♡」

指先でコリコリを撫で続けている内に、勝手にビクビクと体が痙攣し始める。

見せつけていた穴に自分の指が二本侵入し、ぬぼぬぼと抜き差し出した。

(?????……?…?)

何か大きな衝撃がやってきて、ガクガクと全身で震えながら、私は股の間からビュービューと何かを吹いていた。

口からは濁った声が引つ切り無しに溢れ、頭は真っ白だ。

自分の身に何が起きているのか分からないが——特段まずいとも、思わない。

「おまんこっ♡♡さみしっ♡♡指じゃ、たりないっ♡♡はやく、ぶっといのちようだい♡♡串刺しにしてえっ♡♡♡♡」
ぐっちゃぐっちゃと酷い音が鳴っている。

何の音だろうと不思議に思うが、ここは風呂場だ。水っぽい音がしても当然か、と思い直す。

「イきますっ♡ダーリンのおちんぽ妄想しながらイきますっ♡おっ♡おっ♡おちんぽ媚オナニー絶頂しゅるうっ♡♡」

またもや体がガクガクしている。ビシャビシャという音を聞きながら、今日は特に疲れているんだなあと思った。

早めに寝た方がいいかもしれない。

「イきたて勃起クリトリス、皮、ムキムキするからみてえ♡ダーリン、ここ舐めて♡♡舌で転がしてえ♡♡」

アレンさんから受け取った、数種類の花の種を思い浮かべる。明日魔法で成長させて、明後日に納品しなければ。

単に屋内の花壇に種を植えて水をやって魔法で成長させるだけなので簡単な作業なのだが、魔法を使うと疲れる。

だからこそ明日も元気に働くために、早めに休息をとるべきなのだ。

「アレンっ♡アレンっ♡愛してるっ♡イツくう♡♡」

ガクガクするがに股をぼんやりと見つめてから、私は頭を洗うべくシャワーの蛇口を捻った。

いつもお世話になってばかりだから。いつは私も、アレンさんの力になりたいなあ。

2. 悩みの『種』

深く潜るようにして沈んでいた意識が浮上し、私はパチリと目を開いた。

カーテンの隙間から差し込む朝の光。清々しい空気の中、右半身を下にして寝転んでいる私は、シーツの上で体を丸める。

「うん、ん、ン……！」

覚醒するなりずぐんっ♡と下腹部に走った衝撃に、ドクドクと鼓動が駆けている。

頭が真っ白になって、はあはあと口から荒い呼吸音が響いた。

私はきゅううっと切なくなる下腹部を抱え、両目からボロボロと涙を溢す。

「はあっ、うんツ！あ、あ……！」

どんどんと押し寄せて来る激流に体を縮めて、私は耐えていた。
ごぼっ♡と膣口から液体が洩れる感覚にすらビクリと体が跳ねる。
お股の間から、じわじわと湿ったものが広がっていく。それをつ
ぶさに感じながら、私は『ああまたか』とうんざりしていた。

「ふうっ、ふうっ、ふう……！」

次第に衝撃が薄れ始め、体の痙攣が収まっていく。だがそれでも
まだ、お股の間がジンジンとしていた。

ごぷっ♡ごぷ……っ♡

どんどんと奥から液体が溢れ、下着や寝巻き、そしてシーツをも
汚していく。

「……………はあ……」

落ち着いて、そしてガツクリと項垂れる。

今日もまた、朝から洗濯三昧だ。いい加減、嫌になる。

それでも、自分でどうにかする以外の選択肢はない。

私は起きて早々に疲れてしまった体に鞭打って、起き上がる。

「……うげっ」

するとゴポツ♡と奥からまた溢れてきて。見なくとも、足の間に白濁とした液体が垂れたのが分かった。

「もう……今日は特に多いなあ……」

夕方にも出たのに、今朝はまた、すごい量だ。

お腹の奥はジンジンとしていて熱を持っており、それもあって何だか気が滅入る。

でも落ち込んでもいられない。早くまたお風呂場で掻き出さなきゃ、あちこち汚れるばかりだ。

（それにしても本当に、これ、何なんだろう……）

ここに越してきて、少ししてからだ。朝起きるとお腹の中から、

夥しい量の白い液体が溢れるようになった。

毎回毎回、あまりにも量が多いので気になって仕方ないのだが、まだ誰にもこのことを話せていない。

「うーん……」

お医者様に改めて相談するべきかとも思うが、やっぱりデリケートなところの問題だし、なかなか相談しづらい。

けれど大人になったらおまたから白い液体が洩れるだなんて、母親からも聞いたことがない。

離れて暮らしていることだし、今度手紙で聞いてみようか。

（アレンさんには何でも相談してって言われているけど、アレンさんは男性だし……こんなこと相談できないよ……）

昨日みたいに、いつでも私のことを気にかけてくれているのだけれど。あんな素敵な人に、「おまたから白濁としたものが沢山出て

きて、それに困っているんです！」なんて言えない。

たぶんドン引きされて嫌われる。

（でも……万が一、病気だったら……）

健康診断では見つけにくい病気という可能性もある。

だからやっぱり、それとなくアレンさんに相談してみようかな――

――と、私は考え直した。

脱いだパジャマをお股に挟みながら、私はお風呂場に向かう。

そして脱衣所に到着すると、小瓶を手に取り、お風呂場に入った。

例の水晶に股座を向けるといつも通り、自らの指を体内に入れて。

懸命に白濁を中から掻き出す。

そうしてぐっちよぐっちよと鳴る音と反響する自分の声を聞きな

がら、朝食は何にしようかなあと考える、私であった。

午前中はいつも通り、花の世話をしつつぼうつと店番をした私は、正午になってから買い物に出掛けた。

昼食に何を食べようかなと考えながら市場をブラつき、スープとパンを買ってから果物も購入する。

毎度のことながら、店員さんの態度がとても余所余所しい。更には人混みに近付けば見事に人が私を避けていき、ちよつとだけ泣きそうになった。

それでも、『貴女が悪いわけではないと思いますよ』と言ってくださったアレンさんの言葉を胸に、お出掛けを楽しむ。

腕の中には、本日の戦利品が詰まった紙袋。帰って食べるのが楽しみ、と意識的に気分を上げていれば、悲しみは薄れていった。

そうしてあらかた市場を見終わり、そろそろ帰ろうかな、と帰路に着こうとしたところで。

ふと、書店に置いてある新聞が目に入り、何となく手に取った。

『預言者様、結婚秒読みか!？』

一面にでかでかそう書いてあるところを見るに、どうやらゴシップ新聞らしい。

(預言者様の噂なんてして大丈夫なのかな……)

そうは思うが、つつい読んでもしょう。

けれど店先でじっと読むのはきつと、マナー違反だろう。

(続きを読みたいのなら、購入しなきゃ)

ただでさえ遠巻きにされているのに、非常識だと噂されても困る。

私は店主に代金を渡して、その新聞を購入した。

何故だか決して目を合わせてくれなかった老年の店主から新聞を受け取り、私は店舗横の空き地に移動する。

それから木の下に荷物を起いて幹にもたれ掛かり、じつくりと文

字に目を通し始めた。

王様直属の部下である『預言者』様。

彼のお方は占星術によって星を詠み、人や国の未来を占う国一番の魔法使いだ。

親を知らないという悲しい過去がある彼^かの人は王宮で育ち、数多の功績を残してきた。

そんな『預言者様』は色々と規格外で、普通の人には出来ないことも出来るらしい。

戦闘力も高く、怒らせるとものすごく怖いとのことなので、王様でも頭が上がらないとか。

新聞によると、そんな方には愛した女性がいるらしく——会瀬を重ねては、順調に関係を深めているらしい。そして預言者様はそのお相手の方と、そろそろご結婚なさるのでは、という話だった。

（そっか、預言者様って男性だっけ……。すごく神秘的な容姿をしてるって聞いていたから、どちらかと言えば女性の印象だったな）

——そう、考えて。

不意に、ここでは無いどこかの光景がフラッシュバックした。

こぢんまりとした花畑。萎れかけの花。植物の蔓で織った籠。籠の中でこんもりと小山になった野草。それから、木の実がいくつか。

確か、あれは故郷のすぐ近くにある森の一角だ。

私はたまに、夜ご飯の足しになる野草や、デザートになる木の実を求めに森に入っていた。もちろん、貧乏だったわけではない。ただ、自然の中で散歩するのが、好きだっただけ。そしてそのついでに、食べれるものを必要な分だけ、採って帰っていただけだ。

けれどどうして今、その光景を思い出したのだろう。

不思議に思って首を傾げていると、遠くなっていた街の喧騒が戻

ってくる。

（何だったんだろう……）

考えても答えは出ず、とりあえず新聞に目を落とす。

お城勤めの預言者様。そう考えて、同じくお城勤めである知人の顔が頭に浮かぶ。

アレンさんは預言者様に会ったことがあったりするのだろうか。

私には遠い存在過ぎて、何だかあまり、想像がつかない。

（あ。そういえば、ローブの色が唯一のものなんだよね）

アレンさんから連想した、黒いローブ。

それは一般職の魔法使いが身に纏うもので、上級職は白色、預言者様のものは紺色に金の刺繍入った、特別製らしい。

アレンさんが着ているローブも丈夫で質の高い生地を使っているのに、それ以上となるとどれほどのものを使うのだろうか。庶民の

私には全く想像がつかない。

（でも未来が見えるって、怖くないのかな？）

預言者様がこの国を護ってくださっている。それはいつからかの国の日常となってしまった。

だがよくよく考えたら、その力はとても強大で、大変なものだと思ふ。

愛した人の未来すら、見ることが出来るとするなら――

（うーんでも、もしそうなら浮気される心配は無いから、逆に安心なのかな？）

でも未来は変わるといふから、やっぱり何度も何度も愛する人の未来を見て、確認しなきゃいけないかもしれない。

そうになったらいつまでも安心できずに、狂ってしまいそうだ。

（預言者様が、幸せになれるといいなあ）

こうして娯楽として、ゴシップ新聞を読んできました罪悪感もあって。私はそう、願わずにはいられなかった。

* * *

本日の業務を終えた、夕暮れ時。

ドアにぶら下げている看板をひっくり返しに外へ出たら、こちらを見ながらヒソヒソと話し合うご婦人二人の姿があった。

ドアを開いた状態で啞然としていると、手に新聞のような紙を持っている一人と目が合う。

ハッと息を飲んだ様子があった後、二人はそそくさと立ち去ってしまった。

（私……なにか、した？）

おかしなことは、何もしていないと思う。

今日も静かに店番をして、奥の部屋で花を育てた。

お昼には外出もしたが——本当にただ、それだけなのに。

「……っ、だめだめっ！」

パチン、と両頬を叩いて。じめじめした気持ちを吹き飛ばす。

ここは、お花屋さん。ご婦人方は、もしかしたらここでお花を買ってみようと相談していたのかもしれない。

街の皆さんやご近所さんと、未だに仲良くなれない。それは、事実だ。

（けれど未来永劫そうとは、限らない！）

私は右手に握り拳を作り、赤く染まる空に向かって突き上げた。

まだ、開店して半年。まだまだ、これからだ。

今は田舎者と思われているのかもしれない。けれど、少しずつ馴

染んでいって——それからきつと、仲良くなれるはず。お友達だつて、できるはず！

「負けるな、フラン……！」

日々、清廉潔白に過ごして。これからもきちんと周りの人に挨拶をしていこうと決める。

私は沈み行く赤い夕日に胸を張り、うんっ！と大きく頷いた。

（前向きに、前向きに……！）

せつかくお店をやる機会をいただけただのだ。

笑って日々を、過ごしていききたい。

（アレンさん！私、頑張りますっ！）

心の中には、いつでも憧れのアレンさんがいる。

見守っていてくださいね！と胸中で声を上げながら、私は鼻息

荒く、店の中に戻っていった。

ゆらゆらと、温かなお湯の中で揺蕩うように。

心地好い空気に満たされる中で、ズンズンとお腹の奥に衝撃が走る。

薄く開いた口にはぬめった温かなものが入り込み、我が物顔で動き回っている。

脳内には『？』が敷き詰められ、真っ白な世界の中でビクビクと体が痙攣した。

そんな体は硬く、熱いものに囚われ、のしかかられている。

お腹の奥は相変わらずズンズンと太いものに往復されており、ごちゅごちゅと行き止まりをノックされていた。

あ、と漏れた声がどこかに消えていき、突き出した舌がじゅるじゅると音を立てながら吸引される。

（???、?? 奥、何か――）

執拗に挟られていた深い場所で熱いものが弾け、体内で何かがびゅくびゅくと吐き出される。

下腹部の空洞に溜まっていつているその熱が、お腹の中でたふりと揺れた。

（ん、ふっ、んう♡あ、ん……♡）

噴出が終わるなり、また硬いものでズリズリと中を擦られ出す。擦れる場所、どこもかしこが気持ちよくて――動かない体を細かく何度も痙攣させていれば、より苛烈に中を耕される。

息が苦しい。うまく、酸素を取り込めない。このまま、溺れてしまいきそうだ。

（アレンさん、助けて――）

口を動かして頼りになる人の名前を呼べば、触れている熱いもの

がビクリと跳ねて。中を擦る動きが、より激しくなった。

（そこ、やだっ♡だめ、なのぉ……っ♡）

割れ目の上でむずむずしている突起を撫でられて、お湯の中でごぼりと息が洩れる。

逃げようと左右にお尻を振るが、突起を刺激するものが追いかけてきて、しつこくそこを擦った。

（やだっ♡やだっ、や……っ！あああっ♡♡）

燻っていた熱がパチンと弾けて。熱塊をぎゅううっとなぎ締める体内を、ゴリゴリとこそがれる。

ビクビクする体をぎゅうぎゅうと締め付けられ、お尻をバツバツと何かで叩かれていた。

（うう、お腹、ぐちよぐちよ……♡）

太いものが往復し続けるお腹の中はドロドロになっていて、すご

い音がしているように思える。

それもあって中を荒らす大きなものの滑りが良く、繰り返し限界まで振じ込まれてしまう。

（ひううつ♡なに、これっ♡なに、これえ！）

お腹の奥でパチパチと何度も熱が弾け、またもや舌を突き出してはしつこくじゅるじゅると何かに吸われ、絡み付かれる。

目が勝手にぐるん、と上向いて。踏み荒らされている穴の上から、ぶしやりと何かが吹き出た。

（おしっこ、出ちゃ……♡）

ごっちゅごっちゅと中を突かれる度に、おしっこが出てしまう。

それなのにしつこくお股の突起も擦られて、口から「おっ♡♡」と汚い声が漏れた。

（あっ、やっ……！お尻っ）

やがてお尻の穴にも、柔らかな何かが入り込んだ。

温かくて細長い形状のものが、ぬろぬろと内壁を舐め回して、お尻の中を奥まで満たしていく。

明らかに人体の形状ではない何かを、恐ろしく思うのに。何故かお尻はその感触を知っていて、キュンッ♡と締まっては嬉しそうに飲み込んでいった。

（おしり、深い、よお……っ♡♡）

太く、長いものが——とんでもなく長いものが、直腸内をミツチリ♡と満たして、その奥にまで入り込んでいた。

膣の方にまで穴が拡張される中で、膣は膣で大きなものに押し広げられ、ゾリゾリと擦られている。

前の穴も後ろの穴も、限界まで大きなもので広げられ、満たされているのに——そこに苦しさはなく、満たされる悦びしかない。

こんなこと、『日常的に』されて拡張されていなければ、無理なのに。どうして、私の体は受け入れてしまっているのだろう。

これが、夢だからだろうか？

（そうよ、そうに決まっているわ）

そうじゃなければ、こんなに気持ちいいわけがない。

再びお股の突起を擦られて、胸の先もちゅうちゅうと吸われて。

私はビクビクしながら思考を真っ白に霞ませた。

お尻の中はねちよねちよ肉ひだを捏ねられて、前の穴の奥では熱いものが吐き出される。

（きもち、いい……）

暫く動きを止めていた前の穴にハマったものが、再び動き出す。

揺蕩う中で私はゆさゆさと前後に揺れ続け、度々かふっ♡と口から息を吐き出した。

不思議な体験。これは一体なんなのだろう。
今日アレンさんがやってきたら、聞いてみようかな。